

# SHIN CLUB 221

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



「けめともの家・西大井」(『幼・老・食の堂』) 写真: 太田拓実

今月のトーク/monthly talk

## 街ぐるみのケアの拠点づくり

写真は、1月にオープンした、看護小規模多機能型居宅介護施設・事業所内保育所・地域交流スペース・訪問介護、看護ステーションが複合する「けめともの家・西大井」です。2016年に建築・デザインコンテスト「SDレビュー 2016」【鹿島賞】を受賞しました。受賞作品名は、「幼・老・食の堂」(設計: 金野千恵、アリソン理恵/ teco)。竣工間近、昨年暮れの内覧会には多くの人が見学に訪れていました。

運営する株式会社ケアメイト様は昭和33年(1958年)、現社長、板井佑介氏のおばあ様が看護師の経験から「自宅で暮らし続けること」をサポートすべく、城南家政婦紹介所(現・城南ケアサービス)を開始して以来、60年間、「在宅ケア事業」を行っています。

現在、日本における介護保険制度は、施設入居の介護より、「地域包括ケア」「在宅ケア」を根幹にしたものになっています。ケアメイト様では、都内城南地区を中心に、「いま介護が必要な方」だけでなく「これから介護が必要になる方」「ずっとこの街で暮らし続けたい方」の拠り所となり、高齢者介護だけでなく、障害福祉サービスや配食事業、地域保育事業など、支援を必要とする、すべての人たちを対象にサービスの展開を図っています。この「けめともの家・西大井」は、そんな中でも、高齢者の看護小規模多機能型居宅介護施設、いわゆるカンタキと事業所内保育所が一緒になった、新しいタイプの地域ぐるみの施設です。

今月は、この多世代のつながりを大切にす新たな施設について、ケアメイトの板井佑介社長、設計の teco の金野千恵氏、アリソン理恵氏にお話を伺いました。

板井氏はまず、都市部の問題として、高齢者の独居問題があるとおっしゃいます。近所の付き合いが昔とは違って本当に少ない、そして一方で、子育て世代もまた地域でのつながりがなく、共働きで子育てしていくには非常に汲々とした状況がある。介護や育児は本来は暮らしをサポートしていく手段なのに、目的化してしまい、業界そのものの魅力が高まらない一因にもなっているということです。目的は、やはり誰もが自分らしい暮らしを維持できること、豊かな気持ちで安心してこの場所で暮らしていけることです。そこで、その二つがつながるような場所・機会を作り、孤立した高齢者、親をつなげて、「お互い様」という助け合いを生みだしたいと思ったそうです。

設計の teco 様との出会いは偶然でした。板井氏がある勉強会に行ったところ、何人かの発表者の中に金野さんがいらして、建物の半外部空間に注目し、人の振る舞いと建築が相互に関連付けられている様子をお話されており、その内容がとても面白かったそうです。

その後、今回の計画を具体化することになり、金野さんの事例もみて、すごく面白いものと考えていただけそうだと、と期待が高まりました。見学に行った建物は団地の一角をリノベーションした、60㎡くらいの介護事業所でしたが、手前に縁側のようなスペースをつくり、街にオープンに開かれたものでした。「これからのケアは、高齢の方、子どもに関わらず、街ぐるみでやっていくべき」と金野さん。もう一つ、スタッフの方がいかに生き生きと働いているかということと、ケアの風景が街の風景となっていくようなあり方が求められているのではないかともおっしゃいます。

「ずっと、我が家で。明日も、この街で。」というのがケアメイト様の想い。地域の中で暮らし続けることをサポートしていく場所作りへの願いが込められたキャッチコピー。続きは、p3の「フロントライン」で。



けめともの家・西大井（「幼・老・食の堂」）



多世代が共に過ごす多機能型福祉施設

超高齢社会を迎えた日本の現代社会において、これまでの抽象的な人間をモデルにした施設計画のみでは人の多様性に対応しきれず、空間と人の乖離が顕在化している。一方、老人福祉施設や幼児施設では、規模や共同生活のあり方、在宅介護の仕組みなど枠組みや現場の取り組みにおいてはすでに寛容な試みがさまざまに見出されている。病院施設の延長として考えられてきた福祉に関わる建築を再考し、いかに地域資源を包摂する生活空間として街並みの延長へ位置付けるかが大きな課題となっている。

この計画は、高齢者福祉施設の一つである「看護小規模多機能型居宅介護施設（カンタキ）」に加えて、「事業所内保育所」「まちの食堂」を集めた、地域に開かれたお堂のような建築である。敷地は、品川区の大規模建築を背後に臨む木造密集住宅地の私道に面し、周辺の街並みには、生活感あふれる路地や旗竿空地の抜け感と、建物の反復によって小気味いいリズムが生まれている。このリズムと呼応するようにボリュームをおおらかに分節しながら、北側にカンタキ、南側に保育所を配し、双方の活動があふれ出す中央の抜けの空間をお堂の心臓部として位置付けている。そこにキッチンと地域へ開かれた食堂を設え、幼と老、地域の食を支える空間となることを想定している。

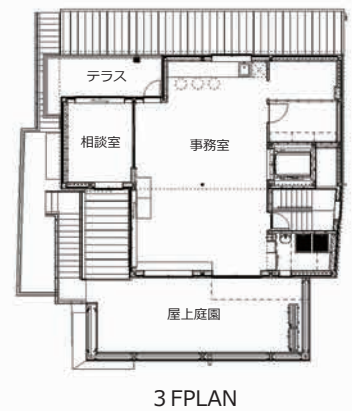
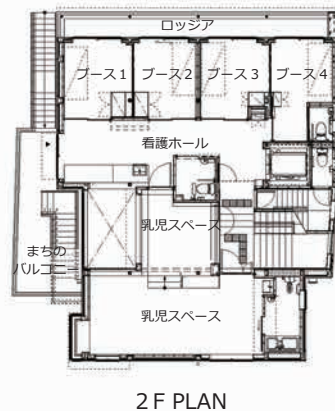
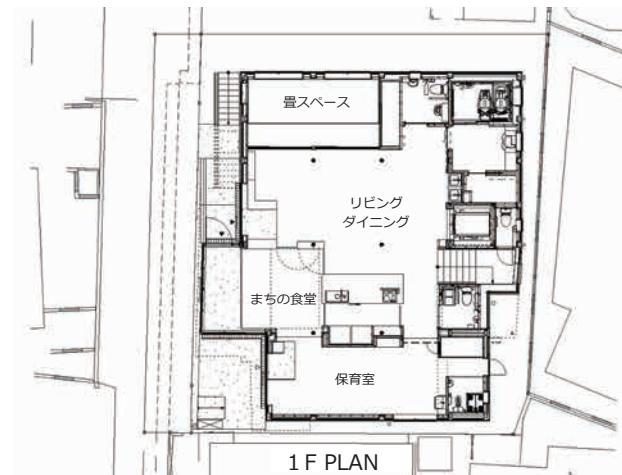
階高の異なるカンタキと保育所の空間は吹き抜けを介してつながり、その大きな気積が温熱環境と人の関係を調整する役割を担っている。さらに、各所に設えたロτζアや窓辺によって外界との多様な交歓を生むとともに、エントランスに設えられたベンチや2階テラス、屋上菜園と立体的に連続する居場所を地域へ開放することで、建物の周縁を含めて地域と施設の相互的なケアが培われる空間となることを期待している。

（金野千恵氏、アリソン理恵氏 / teco 寄稿）



①南西側全景。前面道路は幅員が小さく搬入資材を軽減するため、1、2階をラーメン構造、3階をブレース構造としている②1階南側から左手入口、右手キッチンを臨む③1階吹き抜け。奥が保育室を介してカンタキの個室が設けられている④街に開かれた2階「まちのバルコニー」⑤2階保育スペース奥にはカンタキの看護ホールを介してカンタキの個室が設けられている⑥屋上庭園。パラエティに富んだ半屋外空間が立体的に連続している

規模：地上3階 構造：S造  
 主要用途：看護小規模多機能型居宅介護施設 / 事業所内保育所 / 訪問看護・介護事業所  
 設計・監理：金野千恵、アリソン理恵 / teco  
 構造設計：鈴木啓 / ASA  
 設備設計：柿沼整三 / ZO設計室  
 施工担当：郷 竣工：2017年12月 写真：太田拓実





## 地域を支える福祉施設

## 対談：板井佑介／ケアメイト代表取締役＋金野千恵＋アリソン理恵



板井佑介氏

## ◆株式会社ケアメイト

住所：東京都品川区西大井 2-4-14 TEL:03-3772-1461

設立：1996年8月 代表取締役：板井佑介

従業員：235名(2018年3月現在)

サービス：居宅介護支援、訪問介護、訪問看護、(看護)小規模多機能型居宅介護、保険外サービス「ケメモア」、家政婦紹介、高齢者向け宅配弁当サービス  
保育事業(けめとの家・キッズ)

## ◆一級建築士事務所 teco

東京工業大学出身の金野千恵氏とアリソン(根本)理恵氏が2015年設立した建築設計事務所。住宅、家具、コミュニティスペースなどの設計、建物や、まちに関するリサーチを行っている。

主な作品：向陽ロジックハウス(KONNNO)、第15回ヴェネチアビエンナーレ国際建築展2016日本館『en(縁)：art of nexus』会場デザインなど。

(p1より続く)

ー複合的な要素の建物を成立させるためにどういう点を工夫されたのでしょうか。

アリソン：今回の敷地のように高密度な街の中に、地域の人、子ども、高齢者の方が過ごす場所を一体的に作るには、行政との調整においていくつかの縦割りの部署との協議が必要でした。例えば当初、高齢者のための場所として申請した部分は、子どもなど、他の利用者が使えないという指摘などもあったのですが、丁寧に説明し、運用上問題がないということで一つ一つクリアしていきました。制度の中では違う種類の人と定義されている子どもや高齢者、地域の人たちも、本来はグラデーションの中に位置するもので、例えば「ご飯を食べる」ということにおいては平等な存在です。建物の中央、おへその部分にキッチンを置くことで、食べることを介している人たちが繋がっていくことができると考え、制度的なことを調整しながら実現させていきました。

金野：行政との関係では、ケアメイトさんがこの地で60年の間活動されてきたからこそできたということも多かったと思います。このようなオープンな建物を作ることができたことも、これまで培ってこられた地域との信頼関係があってこそだと感じています。抑えるべき部分は抑えながら、制度によってできてしまう空間を受動的に受け入れるのではなく、思い描いた場所を実現するために可能性を模索し、調整していくことにやりがいを感じますね。

板井：今回のような施設のコンセプトは、やっぱり新しいものなんです。業界としてスタンダードな形式ではない。ですから、新しい物事に日々チャレンジしながら、自分たちでこれから創造していくのだと感じることができると、我々もいろんな経験をしていくことになるでしょう。基本的に、「ダメ」とか「無理」とか、「うまく行かないからあきらめる」という方向で進めることだけは無しにしていこうよ、と言っています。どんどんいろんなことを受け入れて創造していけるケアの現場を作っていきたいのです。最近、小学生の女の子が勝手に来て、赤ちゃん抱いてあやしてる。「じゃあ、小学生がもっと来やすくなるには？」と考える。そういうアプローチは、とてもいいと思いますね。この業界、「安心」「安全」というワードが付きまとうのですが、どこまでやるのかを考えていかなければならないと思います。

金野：実は建物を作っていくプロセスの中で、この建物の「門や柵を作る」



「けめとの家・西大井」1階キッチン横のスペースで

という話が一度も議論になりませんでした。こういったプログラムで、ゆとりのある敷地だとほぼ100%、「どこをセキュリティラインとするか」という議論になります。今回は計画の初期段階から門を作って鍵をかけるような「閉ざされた拒絶感を感じる施設を作り続けるべきではないのではないか」という前提があり、また地域に開かれることで地域の人も含めて見守る場所にするので、門を作ることは違った「安心」「安全」の作り方があっていいかと考え、この建物のオープンなエントランスが実現しました。こういった街への構えは都市型施設のモデルになると感じています。

アリソン：ロジックやテラスなどの生活室に繋がる半屋外空間は周囲から見えるように配置されていますが、地域の人が入っていても良さそうだなと感じるスキを建築として設えることは重要だと思います。

板井：当社の他の事業所の「子ども食堂」に来たことのあるお母さんが、この場所の情報を得て、「今度はただ料理を作って提供するだけでなく、子どもに料理の仕方を教える『料理教室』もやってほしい」と提案してきました。それで気づかされたのですが、そういう提案を受けるきっかけづくりが大事だと。ほからだけでやるのではなく、「それならむしろ一緒にやろう」とやる側に引き込むことを考えています。

主体は、地域の方。ぼくらはそれを応援するのが理想です。皆で考えてもらって、参加してもらえる場にすることがまずは大事ですね。介護保険制度は3年に1度のペースで変わっています。ただそれを追いかけていては、自分たちで何かしている感じがなくなる。そうではなく、自分たちで考えてやっていきたいですね。

アリソン：福祉業界はまさに成長している分野で、例えば「共生型」という高齢者と障害者の双方が使える枠組みの施設が今後実現されていく制度ができてきたりと、日々更新されています。さっきの食堂の件でも、地域の方が出入りすることが普通になれば、「入っちゃダメ」などと言えなくなってきました。そうやって法制度が変わっていくことで、新たな居場所が実現できるようになっていくのではないかと期待があります。

板井：残念なことにはただでさえ介護業界は何かあると、すごく印象が悪くなるんです。だから、やっていることをきちんと見てほしい。特に「地域に対して確かな視点を持っているかどうかを事業所指定の要件に入れてほしい」と自治体に働き掛けようと思っています。

また今回、金融機関に土地活用のあり方としてのペーパーを作ったのですが、アパートより社会的に形を示せる方がもっと良い運用になるんじゃないかと感じました。それに120人の入居者が入る特養を作るくらいなら、数十人位の小さい規模の施設を作っていく方がよっぽど有用です。それが都市部の地主さんのチャレンジに繋がっていくのもいいと思いましたね。

ー本日はどうもありがとうございました。



金野千恵氏



アリソン理恵氏



「Mプロジェクト 学生現場見学会」 7月23日

7月23日、武蔵野大学工学部建築デザイン学科の3年生の皆さんが、建築施工法の授業の一環として施工中の共同住宅の現場見学会に訪れました。弊社では、教鞭をとられる大塚聡先生の設計で、現在、別の場所で住宅を施工中です。

当日は、熊谷で41.1°の観測史上最高気温を記録するという酷暑でしたが、68名の学生さんは全員出席、普段ではなかなか見られないRC造の施工の裏側を熱心にチェックしていました。

建物は、都内の閑静な住宅街の高台に計画された分譲共同住宅。地下1階、地上3階で、敷地レベルの異なる2棟構成です。

集合場所は、駐車場になる予定の北棟地下1階。現在50名の職方さんの

朝礼の場所であり、休憩場所でもあります。酷暑の現場での暑さ対策に、「安全管理に加えて労働環境の整備も重要な現場管理の条件である」と大塚先生。見学ルートは内装工事が先行する南棟の上層階から下層へ、次にグラウンドレベルの差がある北棟へと進み、集合場所に戻ります。ほぼ2週間単位で変化していく内装工事を一度に確認し、座学だけでは得られない情報をその目で確かめられる良い機会となったことでしょう。

見学終了後、女子学生が多いこともあり、営業の窪田幸夫が「女性はマネージメント業務に向いており、弊社でも多くの女性現場監督が従事しています」と現場スタッフの1人、堀内を紹介。大塚先生の現場も女性監督が担当しており、おおいに鍛えられているようです。



①集合場所に集まった学生は、男女ほぼ同数



②大塚聡先生(左)と現場所長の村山貴(右)



③2階ではバスユニットが入り、各種配管が床を走る。3階では壁に引かれたFL,SLなど線の意味も再確認



④質問を受ける村山所長。断熱材の吹付けも始まっている



⑤外階段の上裏の目的地は何のため?



⑥普段は見られない型枠パネルやPコン、鉄筋などが一望に。北棟共用廊下



⑦テレビ付きのバスルームの天井穴は?



⑧入社4年目の堀内は4現場を経験。女性が現場監督に向いている理由を説明する窪田

二連覇を狙います!

第8回「ZEN社一丸大運動会」参加者募集中!

今年も、恒例のZENグループ「ZEN社一丸大運動会」が開催されます。昨年は2度目の総合優勝を果たし、社員一同大満足の結果でした。

今年も7年に一度の幹事会社でもあり、グループ各社の皆様との交流にも力が入ります。お客様、協力業者の皆様、ぜひ辰の社員とともにスポーツの秋を満喫してみませんか。

日時:2018年10月27日(土) 9:15am~

(8:15am 受付開始)

会場:よみうりランド

お問い合わせは、株式会社辰 若井まで。TEL: 03-3486-1570



2018年7月社内勉強会 7月7日

「働き方改革法のポイント」



河内よしい氏: 特定社会保険労務士は労使間における労働関係の紛争において、裁判外紛争解決手続制度に則った代理業務に従事することを認められた社会保険労務士である。

安倍首相が、国会の最重要課題と位置付けた「働き方改革」関連法は2018年6月29日の参院本会議で、賛成多数で可決、成立しました。そこで7月の勉強会では、特定社会保険労務士の河内よしい氏に講演を依頼、短時間のためコンパクトにまとめていただきました。

「なぜ働き方改革が必要か」というと、団塊世代が75歳を迎える2025年問題や少子高齢化で、今後労働人口がますます減少するからです。今回の法改正で大事なことは、以下の3つです。

1. 長時間労働の是正
2. 多様で柔軟な働き方
3. 雇用形態にかかわらず、同じ仕事であれば、公正な待遇へ改善

これらの推進のため代表的な法改正が、①時間外労働の上限規制②中小企業における月60時間越えの時間外労働に対する割増賃金の見直し③一定日数の年次有給休暇の確実な取得④産業医・産業保健機能の強化、労働時間の把握⑤勤務間インターバル制度の普及促進、などです。

日本の労働生産性は、G7の中でも最低で OECD 加盟国の中でも低く、アイルランドのほぼ半分です。

効率的に仕事を進めるため、ぜひ自分の仕事を見直す良い機会にしてください!

編集後記

・多摩で起きたビルの工事現場の火災は、上記学生見学会に同行させていただいてから数日後の出来事で、他人事とは思えず、改めて現場管理の厳しさを思い知らされました。

・8月11日(土)~16日(木)まで、夏季一斉休業とさせていただきます。

(株)辰通信 Vol.221 発行日 2018年8月10日 編集人:松村典子 発行人:森村和男 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-8-10 TEL:03-3486-1570 FAX:03-3486-1450 E-mail: daihyo@esna.co.jp URL: http://www.esna.co.jp

「SHIN CLUB」はWEB上でもご覧いただけます。バックナンバーも掲載しています。http://www.esna.co.jp/shinclub スマホはこちらから →

